

目の前を自動車が通って、紫の花をみる。
バス停でバスを待ってる、昼の２時半。
子供を迎えとなりの母親は、日除けに白い帽子をかぶる。
バス停からは学校の寮が見える。
やっときたバスから子供がおりてきて、中には老人が３人。
運転手が青い帽子。

中心も無い、答えもない、憧れも持たない。それでも人々は生きていく。
大事そうなものを大事そうに抱えながら、
ぐるぐるまわる。

その、永続的な連続を想い、途方に暮れる
今がひとりでに永遠に続いていく、というのはなんと悲しく虚しいことだろう
連続していくことの正しさとは、なんて太刀打ちできないんだろう
僕が（君が）居なくなっても宇宙はきちんとある
星がなくなっても、そのひかりはまだ僕らにとどく
宇宙はまだまだ膨れ上がってく。

この地球には、こうやって二度と来ない一瞬がずっと形をかえながら蓄積してきた。
なら、いつか地球はパンパンになるのか
それとも地球も回りつづけるのか、飽きることなく

なんと虚しいことか。
なんと素晴らしいことか。